

その響を聞く時に 一一永代樹

masahiro-nishida

頭上を見上げた。覆われた梢の向こう、にわかにか空が白む。

——また、夜明けか。

どれだけ歩いただろうか、男の耳に聞こえるは踏み締める土の音ばかり。足下には生い茂った蕨が靴へからみついている。

すでに一昼夜過ぎたようだ。しかしまだ、目の前に立ちはだかる峰が途切れる気配はない。進めば進むほど森の奥深くへと入り込んでしまったかのよう。まるで戦地にでもいる気分である。

「……疲れたな」草木を掻き分け進みながら、男は呟く。

昭和21年秋——戦争が終わってから一年。

出征してからは二年、外地から復員して半年経った。待っていたのは焼け野原。これといて何する事もなく、バラックの小屋に寝泊まりし、毎日郊外の里山で農家から米や物産を仕入れては闇市で捌いて暮らしていた。

峠で占領軍の検問があり、脇の獣道を通って抜けようとした所で迷っていた。知らない道ではなかったのだが、先週の大雨で崩れてなくなっていた。

男の姿は復員した時のままだった。一步一步前へと進むたびに編み上げの革靴と巻脚絆

は軋み、揺れるたびに闇物資を詰め込んだ背囊（せいろ）のベルトが肩へと食い込んだ。まだ残暑は厳しく、空気には夏の匂いが残っている。

森の中は蒸して熱気が籠もり、ぬかるんでいた。湿気が肌にまとわりつく。

目眩がして、男の足下は水面を踏み締めているように覚束なかった。身体の平衡が奪われていくかのような。

地面が波打っているのではないかと男は錯覚した。しかし、山肌の起伏はそのような曲線を描いてはいない。草木で覆われているが傾斜はなだらかだ。歩くほどにゆらりと目眩がひどくなる。男はよろめいているが倒れはしない。足だけが、ただ地面へと吸い付いているような感じがする。

意識が揺らめく——落ちていくようだ。

男は気がついていなかった。腰にぶら下がった水筒はいつの間にか空。中に入っている水はおよそ三日分。一度に飲み干したりなどしていかない。それだけの時間は経っていたのだ。もっとも、気がついていたらとしても、もう遅かったのかも知れない。すでに抗う力など残されていなかったのだから。

眼は虚ろ。瞳孔もわずかに開いている。身体は冷え切っているにも関わらず、額や口の周りには汗がたまって滴り落ちている。脈拍は下がり、呼吸も苦しくなっていた。

それはショック状態において一般的に見られる症状だった。心とは対照に、身体は異変に対して反応を示していた。

きつと、気がつきはしなかつただらう。

その先は隔てられた、むこう。

境界などありはしない。

ただ手を伸ばせば、そこへは届いてしまう。

しかし耳には聞こえず眼にも見えず、匂いもなく触れても感じられない。

だから、分かりはしないのだらう。

やがて、男の意識は重力から解放されるに至った。空を飛ぶように軽く、水へ沈むように重く、その間で彷徨う。すでに天地が分からない。地面だけが足に張り付いているような感覚。手足は痺れ、身体の輪郭が次第に失われていく。

あるのは、ただ存在しているという事実だけで、それは草木と変わらずそれどころか雲や石水に同じで、それだけのものではない。つまり、ただの物質となる。

意味はなく、生じもせず、与えられもしない。

男の四肢からは力が失われた。

そして、一緒に身体の内から消えていった。形はなく充たしていたものだ。固体のように強靱で、液体のように柔らかか。音はなく、赤・青・黄といずれの何色でもない。かつて身体を支配していたものだった。

なくなると、自由になる。

ついに男はその場で倒れ込んだ。そして木偶のようにびくりともしなくなつた。

暁の空は夜の名残で、ブルーグレイで淡く染めた無地のレースがかかっている。雲がシルエットになっていて、峰のエッジをそっと隠していた。空には星がピンホール状に天頂を穿っている。その灰のように白い点描の群れは規則性を持っているかに見えた。

空の形を象っているのだろうか。表面が波打って歪んでいた。波紋は層になり、巨大な壁のように山々を囲み、上空へと螺旋状に伸びている。

巨木の洞の中にいるようだった。

失われていく意識の中、男は鼻孔をくすぐられる感覚を覚えた。

それは草葉の緑臭さとは違う、甘い芳香だった。

平成22年夏――。

カタカタ、カタ。

「――で、本当に行ってきたんだ？」その男は、これ以上ない位に他人事といった調子で相槌を打ち、パソコンのキーボードを叩いている。

パソコンはオフィスに一台、部屋の奥のデスクの上にあった。デスクの前には応接用のテーブルがあり、その向こう側にあるソファーからだど、モニターの背面で男の表情までは分からない。

「大変なんてもんじゃなかったですよ、山奥も山奥だったんですから」ソファーに腰掛けたまま、青年はため息をついた。「都心から車で六時間、その後歩きで二時間半ですから」
「……なるほど」

男はまた、相槌を打つ。

「まだ、あんな僻地あったんですね――」青年は一人感心して言った。「もう帰って来れないかと思いましたよ」

「……ふうん」

カタカタ。

「ダム湖があって、その先の山道を行った所だったんですけど、道なんてもう獣道になっ

てましたからね。住んでいても、どうやって暮らしているんだって言う——」

「なるほど」

「朝の四時に出て、着いたのは夕方近くでしたしね。もうそこで「仕事終了」というか——」

「うん……」

カタ。

「それですね……」

「……なるほど」

青年は少し黙った後で、言った。

「あの、髪切りました？」

「ああ」

「風呂入りました？」

「……うん」

「ポンポコリーのポンポコナーのチヨウキユウメイのチヨウスケさん」

「……なるほどね」

「——なるほどって、あんた人の話聞いていないでしょあんた！」

カタカタ、カタン。

「何が……？」

抑揚のない声。

その中年男はのっそりと、モニター背面の奥から顔を覗かせた。青白い顔をしているが、いつもうであった。また、童顔なのか顔立ちが若いのに髪には大分と白いものが混じっている。

「勘弁して下さいよ、何やってんですか」

「いや、あと3ターンで勝利確定だったんだけど土壇場でスタック突っ込まれてえらい事になっちゃってね。全くAIという奴は空気を読むって事を知らなくて——」

「……何の話してんですか、一体」

眉をしかめる青年をよそに、男はカチリとPCをオフにするとデスクに置かれていた書類の束を手を取った。以前に渡されていたものだった。

「要するに——」男は書類を指先で弾くようにして捲った。「その骨董品について調査すればいいって事？」

「……ええ、まあ」

「前にも話聞いてからね、一応」

そう言うと、男は視線を書類から『その骨董品』へと向けた。

ソファの前のテーブルに置かれていた。

一本の小枝を模した金色の貴金屬で、色はわずかにくすみ、先端は細かく櫛の歯のよう分れている。また、先には親指大の瑠璃色の玉がついていて、替のように見えなくもな

い。もちろん、鑄造年代などからして違うだろうが髪飾りの一種である事は確かだ。

蓬萊珠之枝ほうらいしゆのえだという宝物らしい。

陽の光を照り返し、鈍く光っている。

「しかし……こういった話には関わらないよう言ったんだけどー」男はそう言うとききまで手にしていた書類をデスクの上に置き、パソコンの傍らにある煙草の箱を手にした。「何とも物好きだね……、どうにも痛い目あっても直らないらしい」

煙草を啜え、火をつける。

ゆっくりと吐き出される煙が天井へと昇っていった。

その男はさっきと変わりなく、じっと青年を見つめたまま。心ここにあらずで。視線は焦点が曇っているようだった。

「しかし、見つけてしまうとね」そして、コメントを付け加えた。「まあ、幸か不幸かそういう素養あるんだよね、彼女」

そう、嘔うなくこの男の名だが神崎真字まことといった。

青年も知り合って日が浅いので、詳しくは知らない。弁護士事務所の業務になぜこの男の協力が必要なのか、経緯いきわだかまりを知らない人間から見れば奇妙だとしか言いようがない。

実際今の所、風変わりな人物である事だけしか青年には理解出来ていなかった。

青年はこの男と旧知の間柄である弁護士の助手をやっている。月代詠つきよという名で、個人で法律事務所を経営している。やり手とまではいれないが駆け出しとしては評判はよいと

いった程度の法律家だった。

もちろん、真字の事務所へと今日来ているのも業務の一環である。

8月31日。

晩夏の候だが、晩夏の「ば」の字すらひとかけらも感じられない気候だった。

真字のオフィスがある東京二十三区内ともなるとアスファルトの照り返しで、日中を通りを歩くのは沸いた湯に浸かるのに等しかった。外気がそういう状態なのだから、室内のエアコンも効きがいま一つ。

なので、オフィスの中は少しばかり温かった。オフィスは築三十年ばかり経った雑居ビルの一角。入口には『神崎調査解析事務所』と記されプラスチック・プレートの看板がかかっていた。

一見、何の事務所なのか青年にはよく分からない。オフィスの中にはそれと示すような機材などは一切見当たらなかった。これだと、事務所というより書斎である。

じっと青年を見たまま、真字は訊ねる。

「——詠は？」

「先生ですか、特に……」そこで青年は付け足すようにして答えた。「——そう言えば、今日一日は休みですよ。スケジュール空いていて、今回の件で疲れも溜まってるみたいですよし」

「なるほど……」少しだけ考えるような素振りを見せた。「土産はこれだけかい？」

青年は黙って頷く。

真字は怪訝な顔をしたままだが一理はある。不自然なリアクションでもなかった。

この案件の話があったのはおよそ三ヶ月ほど前の事。元は別の弁護士の抱えていた案件であったが、色々あって引き受ける事になったらしい。

内容としては相続案件と言える。

依頼人は最上精三という資産家だった。享年九十半ばで、春先の事だったらしい。旧家の出自などではなく、バブル全盛の1980年代に不動産業で財をなしたいわゆる土地成金である。商才はあったらしく、その後のバブル崩壊から始まる経済不況でも散財する事なく晩年は悠々自適だったという。

独り者で遺言書も残していなかったが、養子が一人いたので法定相続人となった。他に親兄弟なども生存していなかったから、登記の処理や相続税の支払いなどの手続を行なえばそれで終わりという話であった。

資産に関する書類は揃っていたようなので、本来は特に紛糾する要素は見られない案件だと言えた。

問題が起こったのは、依頼を受けてしばらく経ってから。

手続の直前に相続人が姿を消したのである。

「でも実際、その養子だという人物に会った人間は他にいないわけだろ」詠が事前に真字

に渡した資料から判断するとそうなる。「——というより、そんな人間いなかったって事なんじゃないか？ 確かに、書類ではそうなっているし住所も間違っていないらしいが」

「……まあ、確かにそうなんですが」

「書類作る時に、詠だけが会った」

「そうです」

「夢でも見たのかな？」

「いやあ……」青年は曖昧な返事をした。

「君も、見てないんだろ？」

実はその日、詠がその人物と会った時に青年は同席していなかった。休暇中だったからである。

書類の中にあつた写真を見ると真字は言う。

「よく見ると、これ——CG？」

「……流石に違うと思いますよ、それ」

角張ったアゴをした七三分けだった。髪はリーゼントで固めてテカっている。

「戸籍も確認出来ましたし、住民票もありましたよ」

「なるほど——」真字は写真をデスクに放ると、煙草を再び手にした。「ちなみにその相続人だけど、他に情報は？ 資料に載ってるのはほとんど最上精三の資産の話だけ。こいつの情報はろくになかったけど」

最上精三の養子となっていたのは、遠峰一樹という男で精三が経営していた会社で部下だった。年齢は四十過ぎなので孫ぐらいの歳だろうか。現在は最上和樹となっていて、同会社の取締役となっていたようだった。

最上和樹の希望で、詠の事務所でも対面したのが一月前。

月代詠がどうも色々とおかしいと思いはじめたのは音信不通となっていたからであつたようだ。

自宅の番号にも携帯にも連絡が取れず、会社へと問い合わせると思いもかけない答えが返ってきた。最上和樹はすでに取締役を退任し、退職しているというのである。また、聞いていた住所も確認してみると転居により変更されていた。

興信所の調査で分かったのは、会社を辞めたのがちょうど詠と会ってからすぐ後という事だった。転居も同じタイミング。報告書には転居先の情報も記載されていたので、詠はその住所を訪ねたという。

そこは、ただの荒ら屋だったそうだ。

「人が住んだ形跡なし。そういや……、一応表札はかかってたんだっけか」

「都内一等地のマンションから、再開発も中断されたドブ板通りにですから」青年は真字に言う。「大理石で出来てたから浮いてましたよ」

取り寄せた住民票やその他身分証明にかかる書類に間違いや不正はなかった。また、以前住んでいたマンションはしかるべき不動産業者を通して売りに出されていて、本人の希

望だったという以外に何かしらの背後関係があるといったわけでもなかった。

「ひとまず、空想上の人物じゃなさそうだが、いなくなっただけからどれくらい？」

「もう、かれこれ二週間近くにはなりますね」

「何かしら連絡は？」

「いいえ、全く」

「引越したとしても、身辺整理し過ぎだろ。本当に事件性なし？」

「……そうなんですよ」青年は首を傾げる。「調査所使ったりとか、自分でも調べてみたんですけど、そういう線が一つも見当たらないですよ」

名前があっても、印象はない。そういう人物だったようだ。

「なんせ誰に聞いても、上役だったのに『どんな人だったっけ？』ってそりゃあないでしょうって話で、相当に影が薄かったみたいですからねえ。変な話ですよ。まるで、始めからいなかったみたいなき感じでしたから」

「私生活は？」真字は訊ねる。「人は見かけによらないとも言おうしな。表の顔と違って実は……みたいな事は？」

「色々細かい人だったみたいで、それなりにウザがられてたはみたいですね、公私共に。でも、自分からどっかに消えるってタイプでもないように」

「会社が何か後ろ暗くて黙ってるみたいなき感じは？」

青年は首を横に振った。

「……原因はさっぱりか」

「まあ……、ええ」青年は何ともしようのない、ばつの悪そうな顔をしている。

その様子に、真字は肩を竦めると言った。

「——で、例の如く、面白半分で首突っ込んだわけだ」

まあ、間違っていない。

こういったケースであれば、処理としては行方不明として捜索願を警察に出す事になるが、それ以上の事はしない。人捜しなどは探偵や警察の仕事であり、法律家の業務ではない。法律家の調査はあくまでも事実確認や証明のためである。

が、どうもこういう話になると俄然、彼女のテンションは上がってしまうようである。

月代詠のオフィスには「マイ・コレクション」として用意された棚が一つ、隅っこに置かれている。保管されているのはミステリなどの小説もあるがほとんどは怪奇小説、そして都市伝説怪文書の類。

要するに興味趣向の問題なのだが、別に本人はふざけてなどおらず、いたって真剣であった。ただ時折、そのベクトルがあらぬ方へ向かうだけである。

「あの物好きは……」真字は苦い顔をしている。

真字がそうこぼすのも無理はなかった。忠告はしたが、彼女には全く効果がなかったらしい。

捜索願は出したとして、それはそれ。

詠は助手や與信所の手を借りて最上和樹の消息に繋がりそうな情報は全てチェックした。所詮は素人であり、こういった調査は実もなく終了となるのだがそうはならなかったようだ。これだという手掛かりは見つからなかったが、一つだけそれと思しきという程度の痕跡が見つかってしまったようだ。

三度目となる。実際に住んでいたかも分からない、最上和樹の住まいを調査した時だった。

殺風景な部屋だったようだ。一步踏み込むと床の埃が舞う。電気はすでに止められ、嵌め殺しの雨戸の破れ目から射す木漏れ日に、細かな群れとなって姿を映している。掃除など一度もされていないのだろう。

そこにはテーブルが一つだけ残されていた。部屋の中央にとってつけたように置かれている。

埃のせいでマスクをかけたまま大きくクシャミをし、かけていた大きな黒縁眼鏡がずり落ちそうになった所で、詠の視線はテーブルにある一枚の葉書が目についた。

薄暗がりの中、葉書を手にとってみると四隅が零れていて古い。色も変色している。

窓際まで行って陽射しにかざして見てみると、宛先は主である最上和樹でなくその義父であった精三宛になっていたという。おそらく警察は無関係だと思いつけなかったのだろう。

詠は差出人の所を見てから、葉書を裏にした。

裏面には何も記されていない。白紙であった。その事自体が何らかの意図であるかのよう
うに。

野性の勤なのか、それが何かしら琴線に触れたようで、現地にまで行ってきたのだそ
うだ。

「——困ったものだねえ」

「……ええ、まあ……」

真字まじのコメントに青年はしみじみと頷くと話し始める。

差出人は如月沙月という人物だった。住所は群馬県八坂市八坂町1。

「ごめん下さい——」

詠が用件を話すとあっさりと中へと通されてしまい、二人を驚かせた。そして執事と名乗る人物に中を案内されると、流石に緊張するほかない。

ちなみに、執事はタキシードにオールバック、ロマンスグレーの老人という出立ちである。どこの貴族だ一体。

ここは、群馬県八坂市八坂町1——の筈だった。葉書にあった住所である。そこは町の中心である林の中であつた。そこは林ではなく大きな邸宅の外観であつたようだ。

古めかしい洋館だつた。だが、いかにも由緒のありそうな建物である。地上三階建て、白い壁の漆喰がくすんでいる。いたる所に彫刻も施されていた。かなりの豪邸である。領主の館といった所なのだろうか。町の中にある他の家々とは一見して格式が違うといった建造物であつた。

応接室へと通されると、詠と青年は中へと入った。

三階建ての二階部分、一階のロビーから大階段を上がり、すぐの部屋だつた。中は天井が高く、簡素ではあるがシャンデリアが吊してある。窓はステンドグラス、長い毛の絨毯が敷いてあつて、高そうな調度品が置かれていた。中央にはガラスのテーブルを挟んで革張りのソファが設えられていて、ソファの一方に並んで腰を下ろした。

「……凄いですね」青年は思わず固唾を飲んだ。

「いやあ……、ある所にはあるんですね」詠は円い目をまぶらに円くしていた。

そのまま、しばらく時間が流れた。

いやに静かだった。

——誰も……いないみたい

そんな風に詠には思えた。青年もまたどこか気味の悪さを感じているのだろうか。落ちて着かない様子できよるきよると部屋の中を何度も見回した。物珍しいせいもあるに違いない。

そうしているとやがて、ドアを開く音がした。

「お待ちせしまして申し訳ございません」さっき案内した執事が現れ、口上を述べる。「—

—当家の主でございます」

すると、開いたドアの影から、ずっと一人の女性が現れた。

まだ若かった。二十代半ばの自分とは同世代であるかに見えた。和装で、淡い草色の紗を纏っていて、まるで人形のようなだった。漆黒の長い髪は艶やかで肩に落ち、歩くに合わせてゆらりと揺引く。

じっと視線は詠と青年の方に向かっていった。瞳は澄んでいる。黒が深過ぎて碧色を帯びている印象すら与える。

まぶらに旧家の令嬢だ。切れ長の目じりは優しげで、品のある顔立ちである。

やがて、その女性はソファの前まで来ると立ち止まり、ほっそりとした唇を開くと涼しげな声を部屋の中に木霊させ、頭を垂れた。

その言葉を聞いて、思わず二人はぎよっとしてしまった。

「遠い所を——よくぞおいで下さいました。当主の如月沙月と申します」

——本当に？ どういう事？

——いくつなんだ、一体？

率直な感想であった。その姿は想像からかけ離れていた。あの葉書から考えれば、若くても四〇から五〇、還暦は過ぎていると考えたのも無理のない話だった。

「先生。本当にあの人が、葉書の主なんですか？」

「まあ……、何とも」

ひそひそ話をする二人の様子を他所に、如月沙月はゆっくりと向かいあうようにソファへへと腰掛け、口を開いた。

「御用向きですが、当家に縁のある者の事と伺いましたが——」

その声に思わず二人は話を止め、畏まってしまった。

言葉遣いは穏やかであくまでも丁寧だった。同い年ぐらいであるように見えるのに、どこか気圧されてしまう。

「ぞ、ぞうですね……」「詠は思わずたじろいでしまった。「美は——」

詠は沙月に対して事情を説明した。

時間は遡る——同日、朝。

「全く、何と言うんですか……私はですね、いたって真面目なんですよ。あの葉書は絶対手掛かりなんですよ。それをですね、いっつもいっつも小バカにしてですよ——確かにね、多少出過ぎてるのかも知れないけど、でもこれだって仕事の内なんだし、冗談じゃないって感じですよ本当に。自分だってね、いっつもいっつもFCゲーばかりで私の話なんて全く聞いてないんだし、ちょっと話している時ぐらいいこっちを見なさいよって。この前だってそうですが——」

「前見て下さいよ、前」

話している内に勝手に一人で盛り上がってしまい、最後にはわけが分からなくなるという困った性質の上司に対して、青年は困った様子でたしなめるばかりだった。

月代詠がひとまず脇見運転をしなくなった事で、事故のリスクは減少したものの前を向いてぶつくと言っている様子からまだ安心出来ない趣ではあった。もっとも、高速道路の中でそういう真似をしても平気な事から運転自体には自信はあるのだろう。自信があってもやっっては困る。

フロントガラスからは遠くに山の峰が見える。曇り空のホリゾンにブルーグレイの稜線が浮かぶ。

あと二時間ほどは車の中に違いなかった。すでに一時間半は経っているだろう。東京か

ら高速に乗って三時間半、そこからは歩きで一時間ぐらいたるうか。

「しかし、行っても何も残ってないんじゃないか……」

「どうしてですか？」

「だって、もうなくなってるって話だと……」

「それは、行政区の話でしょう」

詠よの返事はにべもない。

目的地は群馬県八坂市八坂町。古文書などには上野国夜佐加として記載もあるかつては由緒ある土地であった。「かつて」なのは現在では存在していないからである。もう、二十年ほど前に廃村処理となり、群馬県八坂市妹背郡の一部となってしまっている。

今、地図を見てもそこに何らか集落の痕跡を示すような記載はない。

以前は銅の鉱脈があり、古くから鉱山の街として栄えた一帯だった。炭坑もあったらしいが戦後に銅は出なくなり、またエネルギー革命による石炭需要がなくなるにつれ街は寂れていったとされている。

「実際、住民登録なんてなかったじゃないですか」

「過疎化した地域だとあてになどなりませんか。届けを出さないまま処理されたり、書類が段ボールに入ったままどっかいっちゃてる事もあるのだから、実態がどうなってるかなんて見てみないと分かったモノじゃないんです」

そのようなケースもままあるという話だった。書類というものは所詮書類でしかないと

というのが詠の考えである。

実際こういった話で調べた所、ゴーストタウンとなっているような場所で、尋ね人が一人で隠れ住んでいたというケースも稀にあっただらしい。電気やガス、水道などライフラインなどどうしてたのかという疑問もあるが、近くから勝手に引いてきていたり、古い施設をいじれば結構どうにかなってしまおうようだ。

「いや、でも……」

「文句あるんですか、何か」

「だから前見て下さい前」

この状況だと、余計な事は言わぬが吉だった。

黒のパンツスーツで身を固め、小顔には大きな黒縁薄底眼鏡。髪は洒落っ気もなくショートにして、冴えない〇工と違って差し支えない風采でハンドルを握るこの人物の、何をしてもここまでアクセルを踏ませしめるのかについては、余人に皆目見当が及びようもない事なのだろう、おそろくは。

高速を下り、一般道から山沿いの林道を抜け、しばらくすると人造湖に出た。「苑原ダム」と記された看板が立っているが、ダムというより貯水池という規模の湖だった。赤城山系に属する夜佐加山のちようど麓にあたり、ここからは車を降りて歩きとなる。

八坂町はこの向こうだ。山々に取り囲まれた立地となっている。そして、辿り着くためには二つのルートがあった。

この一帯は上空から見ると五つの山が円を描くように並んでいて、中央が五角形の盆地となっていてそこに八坂町はある。山と峰の重なった谷を切通しにしている、道は盆地の各頂点にカーブしながら接続されている。

車に積んでいた荷物を下ろし、詠はリュックサックから地図を取り出して確認する。

「……ここからだ、どっちがいいでしょうかね」

五つの道の内、反対側にある一本を除き、二本は風雨による劣化で廃村以前に崩壊していた。そのため残りは二本。一本は二人のいるダムへと流れ込んでいる水路沿いと、もう一本は山頂を挟んで反対側を通るトンネルだった。

地図に食い入っている詠を見て、青年は言った。

「どっちでもいいと思いますけど、どう違うんですか？」

「……山登りか、洞窟探検という感じ？」

「洞窟って……ちよっと……」

「大丈夫ですよ別に迷路じゃないから」

「……そういう問題じゃなくて」

「山道の方も所々崩れてるかも知れませんが」

「——崩れてるって？」

「何十年も使っていないですし、切り立った崖に出来てましたから。何かの拍子に道ごと落ちるかも知れませんが」

トンネルは少なくとも崩落の危険はないようだった。

トンネルは約3kmほどで、およそ一時間ほど歩いた所でようやく出口に辿り着いた。ライトの明かりでも外壁にはクラックのヒビ一つ入っていない。このトンネルはかつて外部との交通のメインストリートであったようだ。そのため、相当にしっかり作っているのだろう。

だが、一方では乗り捨てられた車など不法投棄されたゴミの山だった。自動車では通るスペースはなかった。

「こういった所ではよくあるんですね、これがまた」詠には分かっていたようだ。

法的に無主や占有されていない所ではよくあるケースらしい。いわば、社会から「ない事」になっているため、都合の悪いものを隠したり捨てたりするには絶好の場所だそうだ。

詠の準備は万全のようで、しっかりと懐中電灯まで用意していた。

「……嘘」

青年が啞然としている横で、詠もまた狐につままれた顔をしている。トンネルを出たら、何事もなかったかのように存在していたからだ。

すでに時刻は昼過ぎ。

家々が並び、少ないが煙突からは煙が上がっている。どう見ても、廃墟とはほど遠い姿だった。

「どうなってるんですか、これは？……」詠は慌ててリュックを下ろし、ハンディスタイルのノートパソコンを取り出した。

中には八坂町に関するデータが入っていた。電源を入れ、データフォルダを開くとそこには写真が一枚、国会図書館でスキャンしてきたものだ。もう何十年前も前になる、八坂町がまだ在りし頃のものである。

町の中央に小高い丘があり、木々が繁って小さな林となっている。そこを中心として格子状に通りが走っている。建物はまちまちで大抵は木造であるが、その中にレンガ積みの洋館や背の低いコンクリートビルまであった。

詠はモニターに写る写真と目の前の風景を、何度も交互に見比べていたようだった。

「信じられない……そのままなんて……」

パソコンをリュックへとしまい、詠は黙々と歩き始めた。

青年も後に続く。

道は所々アスファルトで舗装されていて、目抜ききの街路にはアーク灯が建っている。喧噪に包まれていて、通りには人の姿がある。間違いない、ここで暮らしている。1/1スケールのジオラマではない。紛れもなく、地方の一都市の姿であった。それも昔の、まさに昭和時代の風景だった。

とてもレトロだ。だが、ドラマやシネマのセットではない。幻でも見ているかのようだ。

「どういう事なんでしょう」と青年。

「まあ……」と詠。

目を白黒させるばかりだった。

——再び、館。

沙月は詠の話を一通り聞くと言った。

「そういう事でしたか……」視線を伏せ、後ろ手に髪を掻き上げる。「その者の事はよく知っております。以前はこの郷におりましたが、東京へ行ったと……そうですか、亡くなったのですね」

詠は沙月の話を聞いて質問をした。

「それで、最上精三さんなんですすが相続人がおりまして、最上和樹さんという方なんです
がご存じですか？」詠はそう言って写真をテーブルに置いた。

「——この方ですか？」沙月は写真をじっと見つめた。

「はい」

「この方でしたら、おいででございました」

その答えに詠は身を乗り出した。

「本当ですか？　いつ——」

「ええ……確か十日ほど前、おいでになりました。その時は精三の縁者という事で「沙月の表情に変わりはない。」とくたは存じませんでしたので」

「お聞きになられなかった」

「変わらないとだけしか……」

スケジュールとしてはやはり消息を断った時期と一致している。思わず、してやったりと昂ぶってしまったがそれは何とか顔に出さないように、詠よは訊ねる。

「……ちなみに、どういった話でした？」

「確か、精三の持ち物でここに残されてるものを知りたがっていたようでした」

「……つまり、財産という事で」

沙月はゆっくりと頷く。

最上精三は上京するまでこの町で暮らしていたようだ。だが、この如月という家に縁があるとは詠よも知らなかった。しかも顔見知りという程度はないらしい。

「あの……失礼かも知れませんが精三さんとはどういったご関係で」

「——精三は、当家に仕えていたものです」

答える声は、何事もないように穏やかだが、少し小さかった。

話によれば、最上精三が八坂町にいたのは二十代から三十代半ばの間だったようだ。そして、如月家の使用人というより、執事だった。

これは、会社で言えば単に従業員というより経営者の一員という感じであるので、如月家の家格からすると、最上精三はそれなりの地位にあったと考えられる。

如月家はこの一帯を治める領主の家柄であったようだ。八坂——かつては夜佐加と呼ば

れたこの町は如月家によって開かれた土地であったとの事だ。神職だったようだが、元は奈良時代の造寺司に起源をもっている一族であるそうだ。

やがて、時代を経るにつれて神官から地頭、庄屋から実業家——素封家へと呼ばれは変わっているが、ずっとこの町の長である点は変わらない。

「まだ若く、先行きも頼もしくあったようですが、本人の希望もあったようでした……」
そして、——そう言えば、と執事と呼ぶ。

「……どうされました？」

「ご覧に入れたものが——」沙月はそう言うと、執事に小声で何か申しつけていた。

それは、細長い桐の箱に入れられていた。

何です？、という詠よみに対して沙月は箱を開けて見せた。中に入っていたのは一本の櫛くしの形をした真金属マッシュメタルだった。

「蓬萊珠ほうらいしゆ之枝のえといえます。先日起こしになった最上和樹様がお持ちされたものです」

「蓬萊——の珠之枝？」詠よみはきよとんとしている。

「精三の縁ゆかりの者の証あかしでございます」

「存じなのですか？」

「以前に当家より、精三に贈ったものと聞いております。元は当家に伝わる宝具で、始祖の伝承にまつわる品の一つです」

「……なるほど」沙月の返答を聞いてから、詠よみはそれまで頭にあった疑問を口にした。「ど

なみにですが、如月さんご自身は最上精三さんと面識はあったりされるのですか？」

「私ですか……」そう言って、沙月は俯く。「いいえ——、彼の事は先代より耳にしているだけですのぞ」

そこで、詠は和樹の自室に残されていた葉書の事を訊ねた。

「——これを、ご存じですか」

「これですか？——」沙月は詠がテーブルに葉書を差し出すと手に取った。「これは……先代の出したものかも知れません」

「先代って……お名前は」

「私と同じで沙月です。父が早世しましたので母が前当主でございました。当主の座を受け継ぎました時に名前も継ぎましたので」

「じゃあ、元は違う名前だと」

「……すでに、捨ててしまった名です」

「なるほど——」

昔で言えば、貴族・華族の家だからだろうか。詠には沙月の言葉の意味がよく理解出来なかった。物憂げな表情で、事情が何かしらあるようだが深く詮索しなかった。直接は関係ない話であり、失礼にあたるだろうから。そして、それよりも訊かなければならない事があった。

「ではこの葉書ですが、何かご存知ですか」詠は沙月に手振りて裏を返してみるように示

した。「何も書かれてませんが」

葉書の裏を見て、沙月は仄かにあっ、と声を上げた。

「これは、八尾祀やむいまつりの知らせです」

「八尾祀？」

「この夜佐加に伝わる祭礼です。始祖がこの地を開いた伝えにあります。夜佐加の堤は龍の地——天が落ち、大地は煮えたぎり、水は枯れて死を招く地であったと言います。初めてここへ訪れた如月の者は龍を鎮め、天に星を浮かべ、水は湧き、空に虹、地に花、郷には人。郷の者にも夜佐加縁起として知られております」

「それにちなんだお祭り……という事ですか」

「その龍は八尾。毎年、鎮められた龍へ眠りを祈ると言われています。当家が祭礼の宮司を賜っております。明後日よりの予定となっております、折角いらしたのですから、ご覧になっては如何ですか？」

八坂——もとい夜佐加に残されている伝承は多いという。例えば、次のような一例を挙げる事も出来る。

伊香保呂能 夜左可能為提尔 多都努自能 安良波路万代母 佐祢乎佐祢弓婆

万葉集に残されている歌の一つである。「夜左可」という記載で、その地名がある事が分かる。古代の貴族の作とされている事からその地名がどれだけ知られていたか何う事が出来る。

「——で、その八尾祀は見てこなかったんだ、結局」

「いやあ、三日もいるのは……ちよっと」

真字の言葉に青年は答えた。青年と詠は一泊して帰ってきたそうだ。如月沙月の好意によって館の部屋を提供してもらったそうだ。

「もったいない話だね」

「——知ってるんですか……?」

「二応ね——」青年の問いに真字は答えると、アクビ混じりに座っていた椅子から立ってオフィスの奥へと消えた。

そして、手にカップを持って現れると、再びデスクについた。

「君も飲むかい？」

青年が首を横に振ると「あっ、そう」と言っ、カップに口をしコーヒをすすり始めた。ぼんやり眼でズズズ……と音を立てている。

訝えない感じである。と、いうよりもいつもこんな様子であるようだった。服装も四六時中一緒である。よれよれのシャツにズボン、くたびれたコート。大体、そんな格好だった。およそ、PCゲーム以外にはこれといって興味すら示さない。

その割には博学で、知らない事などないといった様子が半ば嫌味でもある。

——というのが詠の真字への評であった。

「それで、八尾祀やぐらまつりって、どんなものなんです？」

「説明は聞かなかったのかい？ 彼女からは「仕事は関係なかったですから、と青年が答えると真字は続けた。「古祭の一つだよ。始まりは大体1200年くらい前かな。天津神達の天孫降臨後に起こった国津神との諍いざなひいがモチーフには一応なっているが、実際には違う意味があるらしい」

沙月の話を青年は思い出した。

「——確か、龍を鎮める祭だと」

「そうだ……」真字はカップをデスクに置くと、煙草を取り出し火をつけた。「——龍は国津神、如月が天津神になるがこれは後付けでしかない。もともとあった伝承に色がつく

のはよくある事だからね」

「……と言うと？」

「蛇封じだよ」

「蛇？」

「蛇のよ・うな・もの、かな」

青年には言っている意味がよく分からない。

「例えば……」青年の様子を見て、真字は言った。「ここにあるカップがある。この形状だけどうしてこんなふうなっているか分かるかい？」

「ごくごく、どこにでもあるコーヒークップだ。」

茶碗が由来であるから。手に持って使うのにちょうどいい大きさであるから。

入れたコーヒートの熱が逃げにくいように作ってあるともいう。

それとも、ボウル状の方が陶磁器として有用だからだろうか。

「いずれも答えはNOだ」呆気のない解答に青年は思わずすっこけた。「鑄型がそうなるからだよ」

「……なんですかそりゃ」

「安物だし機械で作ってるからな。土は鑄型に押し込んで形を作っている。だからこういふ形になる。違うか」

「——そりゃあ、とんちですか？」

「いや、違う」真字は青年を見据えた。「厳然たる事実だ。形が生まれるのはそれを生み出せるのは元となる型があるからだ。ここで見る限り、それがどんな物なのかは分からない。このカップだってそうだ。製造現場を知らないから色々と考える」

真字の眼差しは冷たかった。

底の知れない淵のように眼窩が口を開けているという錯覚すら与える。

そして、話は続く。

「つまりだ、色々と想像しようが事実はそのから遠い彼方にある。だが、遠過ぎる。あまりにも遠い。だからそこで認識は出来ても理解は出来ない。知る事も出来ない。——よって想像が生まれる。そういう事だ」

「……何が言いたいんです、一体？」

くつくつくつ。

仄かに聞こえる声。笑っているのだろうか。しかし真字の表情に笑みはない。

「たとえ分かっているとしても、説明する事は難しいって話だよ。もの喩えというのはそういう背景があって、伝奇伝承の類もそうだ」

蛇もその一つであるという。

「蛇もしくは龍。いずれも古くからあるイメージだ。いずれも長い尾を持ち、円環や螺旋、様々な形をなす。ウロボロスの蛇は有名だが、ああいったものはいくらでもある。ただの空想ではなくオリジナルがあるって事だよ」

その時、陽射しが陰る。雲が出て来たのだろうか。オフィスに電灯はついてなく、室内は急に暗くなった。

真字の表情が分からなくなった。

暗がりの中で声だけがする。スピーカー越しのように声が割れていた。人間の肉声なのか、これは。

「オ・リ・ジ・ナル？」

「蛇のオ・リ・ジ・ナルさ。だって、奇妙な事だらけだろ？」

相続人の不可解な失踪、未だに存在する廃村。

「それって、どんなものなんですか……」

「それは——」

「……はい」

青年は思わず息を飲んだ。

まんじりともせず、真字は青年に言った。

「どんななんだった？」

……。

雲が去って、また部屋が明るくなった。

「え？」

「——いや、どんななんだったかになって」おもむろに真字は青年に訊く。

「……知らないんですか？」

「当たり前だよ。そんな所行った事ないもの」何食わぬ顔で真字は言った。
何なんだこの男は。

そこまで言っただけ知らないのかよ。

長い付き合いであるという上司の普段の心情というものを青年は垣間見た。

「ホラも大概にして下さいよ——ったく」

青年が口を尖らせるのを見て、真字は言った。

「ホラではないさ」

「えっ？」

「オリジナルはある。君は科学を信用はしているだろう」

「……まあ」青年は頷く。

「あれだって似たようなものさ。経験から原理を抽出して記述している。実験によって立証された再現性によってどうも確からしいという事が分かる。別にそのものというわけじゃない——同じ事さ」

「……本当ですか？」青年は疑わしげな表情を浮かべた。

「そんな胡散臭そうに見えなさんな。科学だって限界はある。宇宙だって背景放射から先は観測限界を越えてしまっただけ見えない。しかし、何も無いわけじゃない」

「しかし、違うものでしょう。実験も出来なげゃ再現しようにも……」

「もしあったら……」

真字まじはにやりと笑みを浮かべている。

「再現性があったら——どうする?」煙を吐き、真字まじは煙草の吸い差しを灰皿へと押しつけた。「もしそうだったら、違いなんてあるのかい? 原因にはね、結果がつきものなんだよね」

「……凄い部屋ですね」

詠には青年の声が聞こえてないかのようだ。テーブルにノートパソコンを取り出しキーを叩いている。

夕方時だが電灯もつけていないので部屋は薄暗いままである。パソコンのモニターからの照り返しで眼鏡が光っていた。

「何してるんです？」

「——ちょっと」青年の問いに詠は空返事。

そんなになって何を調べているのかと言えば八坂町の来歴についてであった。

如月沙月と対面した後、彼女の申し出によって二人は館へと宿泊する事になり、館の三階へと案内され、詠と青年にはそれぞれ一部屋ずつあてがわれた。いずれも応接室同様に調度品の整った洋間である。

この館はどうやら、一階がエントランス、二階がレセプト、三階がプライベートとなっているようだったが、三階は部屋数の割にほとんどの部屋が未使用だった。

詠の部屋に二人はいた。

「先生」

「何です？」

「ざっき夕食に誘われてましたけど、どうしますか？」

「……行きますよ」

「しかし……大丈夫ですか？」

「——断るってというのも、なんですからね」

詠はキーを叩く手を止め、青年を見ると言った。

当然だが、気にならないわけではない。目の前で実際にこうなのだから納得するしかないという部分もあるが、それにしてもである。確かに騙す理由はないかも知れないが、余りにも事前の調査と実態がかけ離れている。

データの洗い直しをするのも無理のない話ではあった。

資料に目を通せば通す程、驚くしかない。町の中を散策すれば詳しく分かるのだろうが、およそ半世紀近くは前になるだろう数々のデータと現在の姿が一致しているようだった。

「まるで……タイムスリップしたみたいですねこれは」

窓辺に立つと町の様子がよく見えた。

山間に姿を消そうとする夕陽が一面、町を照らし出している。

格子状の通りは古代の条房制の名残だろう。辻には市場が立っているのが分かる。そして、区画ごとにそれぞれ澄んでいる人達の様子も違っていた。職業によって積み分けでもされているようだ。遠くには背の低いビルの姿もあるがどこか風景からは浮いている。おそらく、建設されたばかりなのだろう。鉾山の町だから麓近くには採掘場かと思われる

精練所の煙突や掘立小屋の群れが小さく――

「……あれ？」

詠は小さく声を上げた。

何か違和感がある。

「どうしました？」青年は詠に訊ねる。

「いや……あのですね」そして、詠は一旦口をつぐんでから言った。「――いや、あの、えーっと……なんでもないです」

……変なの、と言わんばかりの顔をする助手を尻目に、そのまま黙ってもう一度町の様子を見つめ続けている。

別に絶景だからではない。この風景の中に違和感の原因があるような気がしたからだ。

答えが出ている筈のパズルでも見ているかのようだ。喉まで出かかった声のようにもどかしい。もう少し見ていれば、その答えがひらめくような感じがした。

だが陽が沈むまで、結局それが何だったのか分からずじまだった。

如月家の夕食だが、夕食というより晚餐であった。やはり、どこまでもここは旧家の家柄という事なのだろう。まるで、フィクションにでも出て来そうな風景だった。

「大したおもてなしは出来ませんが――」

如月沙月の言葉を聞いて、二人は言葉を啞然とするしかない。

「(いつかは、どんななんですかね……?)」青年は耳打ちする。

「(……まあ)」「詠にもコメントのしようがない。」

料理は洋食だろう、とぐらにしか言えない程に凝っていて、普通に美味しかった。何ら変わった点は見当たらない。一方で、夕食の席には沙月の姿しかない。

「他の方は……?」

詠が訊くと、沙月は答えた。

「ええ、そうです。父母共にすでに他界致しまして、弟もおりましたがすでに……。今では私だけでございます」

「……それは——失礼しました。余計な事を」

「いえ、そんな……」変わらぬ微笑みを滲えている。完全に整った顔立ちだ。「普段は一人ですから、こうして来て頂ければ余人も大して訪れぬこの館も華やきます。気になさるぬよう——」

沙月の姿は詠から見ても、ほれほれするくらいだった。昔、教科書で読んだアルカイック・スマイルというものだろうか。そういう趣味はないのだが、少し良からぬ感覚に目覚めてしまっそうだ。

「(……どうしました?)」

「……なっ、なんでもないです」慌てて青年にそう言うと、詠はナイフとフォークで何かのソテーを口に運んだ。

食事が終わると食後のお茶まで出た。

ダージンテンテイ。いい香りがする。

「明後日は八尾祀やぐらまつりです。所用のためご案内叶いませんが、明日は郷をご見物なされればよいかと——大したものはございませんが、ごゆっくり下さいませ」カップを口にしながら沙月は言った。

「はあ……どうも——」詠よみは沙月に訊ねる。「あの、八尾祀やぐらまつりでしたっけ？ どんなお祭りなんでしょうか」

「祭りは当家の邸宅にて行なわれます。龍へと捧げる誓ちかを輿こしに入れ、郷を一周した後で当家にご参ります祭殿にて——」

「ちよっと待って下さい……！ 誓ちかって……生誓いせちか？」

「もちろん儀式としてですから、本当に捧げるわけではありません」

それを聞いて詠よみは言った。

「——あと、さっき祭殿と言われましたけど……どこに」

「当家裏の庭にご参りまして、祀りの時だけ開かれる社です」

この館の庭園は大部分は林だった。入口には門構えはなく、背の低い石段があって登ると小さな噴水が見え、石畳の広場がある。西洋建築の趣だった。しかし規模は小さく、玄関前のフロアという感じではない。

明らかに林の一片の広さから考えれば、館の大きさも含めれば明らかに小さいように思

われた。

「じゃあ、この家の裏に」

「はい」沙月は頷いた。「この木々に覆われた林は小高い丘となっていて、かつては神域とされた磐座でございました。如月は磐座の守でございますから」

磐座とは古神道の神体の事である。要するにこの館の裏に神社のようなものがあるという事なのだろう。

そうなると、裏手にある社殿が主で、この館は社務所のようなものだったのだろうか。時代と共にその役割が変わっていったのかも知れない。今ではおそらく2/3になるだろう社殿の敷地を隠す格好でこの館は建っていた。

「どんな風になってるんです？」

詠は訊ねたが、沙月は答えなかった。

「それは掟にて口上にては申し上げられません。祀りの時にはご覧に入れられると思えますので」

そのように言うだけだった。

——その夜の事。

食事が終わり、自室へと詠は自室へ一人戻るとベッドにスーツ姿のまま寝っ転がっていた。

電灯の下で見ると部屋の豪華さがよく分かった。机にベッド、家具もだがウォルナットのダークブラウン。壁は漆喰で丁寧仕上げられている。

——どれだけ裕福な家だったんでしようか
ぼんやりとそんな事を考えていた。現代であれば、ほとんど博物館もしくは史跡となっているような類の建造物だ。

視線の先にはシャンデリアの姿がある。電球の光でカッティングされたガラスがキラキラと光っている。光の先に高い天井の様子がおぼろげに見えた。天井はアーチ状に柱が通してあり、壁面はやはり漆喰の仕上だが、フレスコで画が描かれていた。

シャンデリアよりかなり上の所なので薄暗くて細かくは分からないが、何か大きく描かれていた。

部屋に覆い被さるように蟻局を巻いて横たわっている。大きく細い。長い身体の末端は平べったく広がっていて、先端は枝分かれしている。

鱗に尻、胴に両手、そして頭。

——……人、龍……魚？

そう思った時、音がした。

「何ですっ——！」身体を起こした。

ふう。

風の音だろうか。

（ふうふうふう）

「この音は……」

風鳴りというより、地響きのような音だ。大きくなったり小さくなったり、一定のリズムで変化している。

まるで、人の息遣いだ。

詠は立ち上がり、窓辺へと駆け寄り外を見たが、外の光景に変わりはない。

「……何の音でしょうか？」ほんと軽く耳を叩いてみた。

異常はない。

結局、何の音かよく分からなかった。ただ耳には聞こえてくる。

思えば、成り行きで慣れてしまっているが、奇妙な事だらけ。今日一日の出来事を振り返ってみると夢の中にもいるかのようなようだ。良い夢か、悪夢か、その辺りはまだ判断がつかない。

収穫としては、確認出来たのは最上和樹がここへと訪れたという事実と蓬萊珠之枝という貴金属についてだった。

蓬萊珠之枝については詠も初めて目にしたものだった。元は最上精三の所持していたものだったのだろうが、財産目録にそのような物品があった記憶はなかった。実際に、夕食前に持っているデータを漁ってみてもそれらしい記録は存在していなかった。

どこにあったのだろうか、あんなもの。

あと、最上和樹はその日の内に八坂町を後にしたそうだが、如月沙月は行先までは聞かなかったそうだ、当たり前ではあるが。遺産について聞きにきたそうだが、何か探していたのだろうか。あと実際の所、沙月とどんな話したんだろうか。

「うくむ」考える事が一杯で、詠よにも分からなくなってきた。

ベッドには寝間着が用意されていた。建物は洋間だが、寝間着は浴衣だった。特に着替えなど持ってきてなかったので利用させてもらう事にした。ひとまず室内にあった備え付けのシャワーで汗を流した。

「――ま、寝ましようかね」

そう一人呟いた時である。再び音がした。

カンカンカンカン、カッン、カッン。

今度は、廊下から聞こえてくる足音だとはっきり分かった。青年かとも思ったが、確かスニーカーだったので、あんな足音ではない。だとすれば、この館の従業員の誰かだろうか。でも、こんな時間に？

部屋にある掛時計を見た。すでに時間は夜の10時を回っている。

詠よはそっとドアを開け、廊下の様子を伺った。

廊下には壁に沿って灯りがついている。しかし、数は少なかったので端までは見えないくらいに暗かった。見えるのは二部屋先くらい。

三階は隅の階段から上がると、壁沿いに通路があって角を曲がるとそこから部屋の並び

に入る口が三つ。手前の並びに詠や青年の部屋がある。

詠の部屋は一番奥にあった。遠くの通路の様子は分からない。

——誰もいない？

すると、仄かに明るくなった。灯りである。燭台でも持っているかのよう。光の輪が壁に映っている。そして次第に大きくなっていった。

「……あ」

柱の陰から現れたのは沙月であった。手にはランタンを持っている。通路をゆっくりと進む。よく見るともう片方の手には何か包みを抱いている。

そしてその後、詠はある事に気がついた。

——あれ？

沙月が、泣いている？

灯りによって、まだ乾いてない涙の跡？

何かあったのだろうか。表情は凍てついているように見える。無表情だ。魂が抜けている表情だった。

本来は深入りするような事ではない。だが、わずかに目にした姿が詠の心を捉えて話さなかった。それは今日ここで目にした沙月とは別人のようだ。

気がついたら、部屋から出て後を追っていた。

沙月は通路を進み、一番奥の角を曲がっていった。居室なのだろうか。とはいっても、

この階では一度も見かけなかった。青年と二人でいた時も、部屋の外で足音一つ、人の気配すらなかった筈だ。また、一階と二階に執務室があったのだろうか。

詠もまた奥の角を曲がったが、人の姿はない。

——どういう事……あれは？

よく見ると、並んでいるドアの一つが少しだけ開いていた。

そこは詠の部屋とはレイアウトが異なっていた。ベッドや家具といった生活用品は見当たらない。書棚が両方の壁一面に備え付けられていて、テーブルが一脚あるだけだった。

灯りはついていない。大きな窓から射す月の光が、黒い影をぼつりと管間のシミのように浮かび上がらせている。

ふいに、陰が揺らいだように見えた。

「誰……」

身体を貫くような眼差し、合わせて鋭い声に、詠は沙月の前でひるんで立ち尽くしてしまった。

「あ……あの……」

「——これは……失礼しました」ドアの所にいるのが詠だと分かると、さっきの剣幕が嘘だったかのように沙月は言った。「どうなれたのですか？」

何で泣いていたの——と聞く事は出来ず、詠は答えを濁した。

「いや……ちょっと……、如月さんは……」「居室でない事は明らかだ。

「私ですか……、少し寝付けなかったものですから、書物を嗜もうかと」そう言うといつの間にか消えていたランタンに火を入れた。

ほうと柔らかい明かりがテーブルの上に微かに広がった。

「——電気、つけましょうか？」詠がランタンを見て言う。

「いえ、大丈夫です」沙月は優しい声で答える。「この部屋にある書物は古い物ですであまり光に当てないようになっています。陽の出ている時にはカーテンで隠しているのです」

「そう……ですか——」詠はそびえ立っている書棚を見回した。「凄い量ですね。図書室なのですか？」

「ええ、書庫でございます」

如月家に伝わる古書がほとんどだという。それ以外にはこの町に関する官公書含めての資料全般。他にも一部の小説なども収められているという。ただ、それにしても相当な蔵書量であった。

視線がぐるぐると一巡すると書棚が途切れている箇所があった。窓の正面。そこに、石積み暖炉があったようだ。炉の中は薪や煤など微塵もなく、今では使われていないのが分かる。そして、その上にあるものが詠の注意を引いた。

一枚の絵画が、額に入れて飾られている。油彩画であった。一方で、何の絵であるのか暗くて分からない。

深い色遣いのためか、目を凝らしても輪郭すら見えない。真っ黒に塗り潰しているわけではないが大きな穴みたいだ。

「どうしました？」

「いや……あれなんですけど」詠は絵の方を指で差した。「何が描かれてるんです？」

「あちらの絵でございませうか、あれは先々代の頃、この地に伝わる伝承を元に描かれたものです。当家には、このような品が多くございますので」

さっき話していた八尾祀という神事の事だろうか。

「龍？」

「いいえ……違います」沙月は詠の問いに答えた。「あれに描かれているのは人魚の姿です」

「……人魚——ですか」

「はい」何事もなく、沙月は頷いた。「八百比丘尼の伝承がこの郷にもあるのです」

八百比丘尼は日本の人魚伝説ではよく知られたエピソードの一つである。人魚の肉を食べた娘は不老不死になって、最後は世を傳んで尼僧になる話だ。大抵は岩窟に身を隠してしまうというオチで終わっている。

ただ、夜佐加の人魚は若干最後が違っていた。

「比丘尼はある土地に隠れ住んでいたようですが、その地の若者と夫婦になったようです。子を儲け、幸せに暮らしていたようです。しかしある日、若者は当の帝のお召しで都へ

と上り、夜佐加を開く役を仰せつかったそうです」

「それが始まり？」

「伝承ですから、色んな話が残されているのですよ」話を続けた。「その者は夜佐加で生涯を送り、故郷には帰らなかつたと言います。残された妻子は帰らぬ男を待ち続け、子が父を捜す旅に出てからは比丘尼一人その地に留まり続けたそうです。あの蓬萊珠之枝も子の旅立ちに比丘尼が持たせたものという伝えもあります」

「それで？」

「――子は父と再会し夜佐加で暮らしたそうですが、母である比丘尼は不老長寿のまま帰らぬ夫を待ち続けた後、独り海へと身を投じ、人魚となって何処かへ去つたと伝えられています」

つまり、如月家は人魚の子孫という話だった。

詠の部屋にあった天井画を思い出した。あれは人魚の絵だったのだ。上半身は人であり、下半身は魚の尾を象つたものだ。

弁護士稼業で旧家・名家・素封家といった人達と会う機会もあるから、詠も理解しているが確かに古い家柄ほどこういう逸話は多いのだ。しかし、知れば知るほど大した家柄であった。

「……人と人でないもの。心叶わず相容れないという物語」

その時、詠にもその様子が分かるくらい沙月の表情は曇つた。

「どうしました」詠は訊ねる。

「いいえ……何も」沙月は答えなかったが、誰に言うでもなく付け加えた。「永遠の命を得て、待ち人は現れずまた時の移ろいからも取り残される。比丘尼が門前で道の向こう、朝霞の景色をどのように思っていたのでしょうか？ あなた様にも、由がある話なのかも知れません」

詠にはその言葉の意味が分からなかった。

「私に？」

「——だって……ここにいますから」

沙月の表情がにわかに、妖しく歪む。

瞳が煌いている。

見ていると中へと吸い込まれそう。

その時、鼻孔がくすぐられるのを感じた。何かの匂いだ。とても甘い。

思った途端、詠は気が遠くなった。

——目の前が、昏くなる。

——。

目が覚めると詠は自室のベッドで横になっていた。布団もかぶり、普通に寝ていたようだった。身の回りを見ても変わった様子はない。

「……夢？」

そのままほうとうとしてしていると、ドアをノックする音がした。青年の声も一緒に聞こえて来る。

「寝ぼけてたんですか？」

「……やっぱり、そうなんですかねえ？」

青年に詠は言うが、声の調子からして釈然としていないようだった。

二人は八坂町の散策——もとい見物に出ていた。青年には八尾祀を見物してから帰るといふ話を詠はした。

青年は反対であったが、上司である詠に押し切られた形となった。どうしてそこまで詠が執着するのか見当もつかないが、何かしらこの町に手掛かりがあるとでも考えているのだと理解するしかない。

八坂町は昨日見た姿と何ら変わりがなかった。散策ルートは左回りにこの五角形の土地を一周する道筋となる。それぞれ区画ごとに生活している様子がよく分かった。特に露店が居並ぶ市場は活況で人がひしめきあっている。

「——凄いですね」

青年は驚いていた。取引されている商品の豊富さにである。実際、詠から見ても山菜に茸類といった山の幸だけでなく、魚類や昆布、海産物も豊富であった。

「本当——」店によっては食料品以外にも、織物などの工芸品を扱っている所もある。「色

々ありますね。こんなにたくさんだなんて……」

それはおよそ、信じられない程の物量だ。市場はそれぞれの区画で二つ、ないし三つは立っていたが、いずれも同じような様子である。町の規模からするとちよっと考えられないくらいだ。

一日この町の中を歩き回って、詠は感じていた。

やはり、おかしい。これは変だ。

別に道行く人に妙な所があるとか、一見すると問題はないのだ。もちろん、ここが廃村である事を除けばである。一方で、その点を考慮しなければ見かけレトロではあっても、人が暮すには難しくはないし実際にこうして町は存在している。

——うむ

やはり、どこかおかしい。

色んな事に「くでなければ」と言わなければいけないなんて事があるのだろうか。

しかし、こうして現に生活はされている。

この違和感は何であるのか、上手く説明出来ないでいた。中々言葉にならない。おそらく、そういった枝葉の話以上にもっと裏があるような気がするのだが。

「どうしました」

「はい？」青年の声に詠は我に返った。「いや、ちよっと考え事をですね」

「何ですか？ 相続人の件ですか」

ここで、相続人である最上和樹の身に何かあったのだろうか。

「——その日の内に帰ったのだから、こことは関係ないんじゃないですか」

「本当にそうでしょうか」

「だって何も起こりようがないでしょう。あれば、分かるでしょうに」

警察がなくても、駐在所ぐらいはあってもおかしくない。

「確かに、そうですね」

詠はそう言った後で気がついた。

——あれ、そんな所今まで……？

「あのここで……警察見かけました？」思わず歩みを止め、詠は青年に詰め寄る。

「えっ……、そっぴりや見ませんね」

おたおたとついていく青年などお構いなしに、詠はもう一度町の中を大急ぎで一周した。

「やっぱり……ないんだ」一周して、独り詠は咳く。

「——それが、どうしたんですか」膝をつき、疲れてあごを出して、青年は言う。

「ないんですよ、やっぱり」

これが何を意味しているのかとまだ把握仕切れていなかった。

ある筈のものがない。

他に何が？

「うくん。なんだろう」詠は歩きながら考え続けているが、これといったアイデアは浮か

んでこない。

「……先生、そろそろ帰りませんか？」後ろからは青年の声でした。

陽は大分傾いている。八坂町を訪れて二度目の夕方、間近となっていた。

ずっと町の中を歩き回っているが、目で手当たり次第に見えるものを追っけていても答えはないように思えた。

「戻りましょうか先生」

「……そうですね」

詠はため息をつくばかりだった。

何か、おかしいんですよねえ、と詠としては考えざるをえない。八尾祀があるのも、明日までここに逗留するが、このまま帰るわけにもいかなかった。もう少しで頭の中で引っかかっているトゲが抜けそうな感じであるのだ。また、手ぶらで帰ったら帰ったらで真字に会った時にコケにされるような感じがしてそれも不本意である。

ここへ来る前に相談したのだが、一笑に付されてしまった。無関心そのもの、なおかつ思い過ぎしだの考え過ぎだの冗談もほどほどにだの妄想も大概にだの……。

……。

思い出すだけでムカついてきた。

——とはいっても……すっかり、どうしまししょうね

勝手に埒方に暮れながら歩みを進める。

その時である。

ふいに、目が眩んだ。

「——ん？！ 何ですか？」 詠はたじろぎ、顔をしかめる。

光の方を見ると、それは通り過ぎようとしていた露店の裸電球の明かりだった。透明の球状バルブ内でフィラメントが輝いているのが分かった。詠の視界を脅かしたのはこの光であるに違いなかった。

……これは？

その輝きを見た時に、詠の中にあるわだかまりが、急速に思考として形になっていったのだ。

電気はどこからくるのか。それは、発電された電気が変電施設によって調節され送電線を辿って個々の家へと届けられる。水道やガスもそう。全てシステム化されたインフラである。そして、それはライフラインだけに限らない。目に見えているものには、そう見えるまでには保障された過程が必要なのだ。人間の生活する事——その前提としては社会制度が存在し、それは制度としての合理性によって機能が担保されている。つまりシステムによって、結果としてそう見えるだけに過ぎない——

「そうです！」

突然の叫び、びっくりしている青年をほったらかして、詠は一目散に館に向かって走り出した。

詠は館へと駆け込むと一気に三階へと駆け上がり、あの部屋へと入った。

昨日、夢か現かはともかく、夜に入った筈の書庫である。ここにある資料を見れば、詠の考えが正しいかどうかを確認出来ると思ったのだ。

電気が通っていないためか、スイッチを押しても電灯はつかず、カーテンを一気に開けて陽を入れる。

錆色をした夕陽の灯りが部屋を染めた。

詠は夜佐加に関する記録がないか書庫の背表紙を一心不乱に追いかけた。探しているのは主にこの町の公共施設についての資料だ。

そして、それらしい資料が見つかるに次々とテーブルの上に広げ、塗り潰すように目を通している。

そのまましばらくして、一枚の地図を広げたまま詠は窓辺へと立った。手にした地図には町の各家々や施設など詳細な位置情報が記されている。

窓の風景と地図の記載を繰り返し見比べ、愕然とした。

「やっぱり……ない」

この町には、存在していないのだ。ライフラインも含めたインフラ施設はもちろん官公署全て。そればかりでない、この館の裏手にあるという社以外に神社仏閣の宗教施設も全てなくなっている。また区画ごとの建物を見ても、デザインが統一され過ぎている。貧富

の差による大きさの差が存在していなかった。

この町は、外見上確かに「町」と呼べるようには出来ていた。しかし、それはあくまで外見だけの話でしかなく、都市機能として考えればとてもではないが存在出来るような状態ではありはしないのだ。全てが辻褃合わせのように出来ている。

この町はハリボテでしかない。動物で言えば剥製と同じだ。
つまり、生きていない。死んでいる。

この町はやはり、ゴーストなのだ。

「でもそんな事……?」

他の資料も読み進めようとして、一冊の本を開くと本の中に手帳が挟まっていた。

開いてみるとそれは日記帳のようだったが、インクの文字は滲んでしまっていて読む事は出来なかった。それで読み取れる記述はないか、パラパラとページを捲っていると一枚の写真が挟んであった。

写真は白黒。というより時間が経ってしまっていてセピアに変色してしまっていた。あの最上和樹の葉書と同じくらい昔のものに違いない。

集合写真。

何かの式典で、如月家関係者一同を撮影したものだろう。時期としては今から半世紀近く前である事に疑いはない。写真の中央には紋付・袴の老人が座っており、取り巻くように一族・使用人達が並んでいる。きっと、中央の老人が当時の如月家の当主だ。

老当主の隣に一人、若い男が立っていた。まだ青年といった年頃だが、身なりなどから側近の一人。老人の息子？——だとすれば沙月の父という事になるが親子と考えるには余りにも顔が似ていない。母親似だからとも言えそうだが、それらしき人物は写っていない。すでに他界していても不思議はないが……。

一方で、どうしてもそういった間柄だとは考えられなかった。男の雰囲気が厳肅過ぎるせいだろうか。あと、この若者の面影にどこか見覚えがあったからだ。

誰かに似ている。誰だろうか。

しばらくの間、じっと写真に見ていて詠は声を上げる。

「あっ！、この人は……」

最上精三である。彼のプロフィールの資料にあった若い時そのものである。あれは上京後であるから、歳をとってこの姿より多少いかつくなっていた。しかし、同一人物であるのは確かだ。時期としてもびたりと符合する。

「しかし、どうして」

これだとまさにN.O. 2である。ずっとここにいれば将来は約束されていた筈だ。わざわざ身一つで上京しなければいけない事情があったのだろうか。

その時、声が出た。

「月代様——どうされました」

詠が声の方を見ると、ドアの所に沙月が立っていた。

「何を——なされてたのですか？」

「いや……別に……少し調べものを」しどろもどろに詠は答える。

「左様でございましたか、どんな事をです？」

「それは……」

沙月は静かに詠を見つめていたようだった。その様子だが、普段と変わらないように見える。

「——弁護士様というのも大変でございますね」

ぎよっとした。詠の背筋に怖気が走る。

沙月の声は抑揚が失われているようで、それは人間の声色に聞こえなかった。まるで、スピーカーから流れている——機械の音。

「あなたは……一体」たじろいで、詠は後ずさる。

その顔は整っていた。しかし、整い過ぎている。白い肌には生氣はない。金属の表面みたいだ。

隠そうとし手にした写真をちらりと見た時、さらに詠は息を飲んだ。

さっきまで気がつかなかった。

それは精三の後ろにいた人物について。女性だった。華やかなドレスで、女中達の格好とは装いが全く違う。明らかに如月家の主筋の人間であった。

如月沙月であった。

似ているというレベルではない——瓜二つ……なのではなく、本人。

「……何十年も……前なのに」

「それが……如何しましたか？　ここは夜佐加——変わる事のない蓬莱の地」
そう沙月が言った時、詠は目眩がした。

「……これは、昨日の」

——甘い芳香。

気息さが身体を包む。

あれは、夢ではなかった？

まだ夜には早かった。そして、昼とするにはもう遅い。その間の時間。陽はまだ空にあ
って、山にかかるうとする頃。宵闇が地上を覆うにはまだ。

だが詠には、一足先に訪れた。

「……で、それにしても、こうして彼女が誰か奇越すとはね——珍しい」真字は蓬萊珠之枝を手に取っている。

興味津々というわけではなく、事もなげに、ひどくつまらなそうな表情を浮かべていると青年にも理解出来た。

「何だか分かりますか？」青年は真字に訊ねた。「やっぱり値打ちものなんですかね」

「そうだねえ、ま、それなりにするとは思うよ」貴金属を弄りながら答える。「蓬萊珠之枝は竹取物語にも出てくるくらい由緒あるものだし」

仏御石鉢、火鼠皮衣、龍首之珠、燕子安貝、蓬萊珠之枝。かぐや姫が出した五つの難題として有名である——東の海に蓬萊といふ山あんなり、それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實として立てる木あり、それ一枝折りて賜はらむ、と記されている。

「蓬萊は夢の島の事だ、ゴミ捨て場じゃなくね。永遠の都だ。いずれにしる昔から有名な所っちゃ所だ」

「——あそこに、そんなものが……？」

「不自然ではないね」感心している青年に対して、真字は言った。「蛇に龍だろ？ それだったらそんなものもあるだろうよ」

言っている意味が青年には皆目見当がつかない。

「……なんで、あっても不思議じゃないんですか？」

「同じだからさ」

全てが円のイメージである。

蛇も龍も、長い尾をもって円を作る。円——円環。終わりが無い、という永遠。完全な静止であり調和を表わす。

「昔からよくあるモチーフだからね」

「モチーフって？……、それって連想ゲームみたいなもんですか」

「連想ゲームってわけじゃないさ。原因が同じであれば結果もまた同じ。オリジナルがそうなのだから、現れるイメージも似るのだよ」

真字まじの言うオリジナルがどんなものか、さっぱり分からないままである。適当なでまかせあてまかせでしかないような気すらさせる口ぶりである。

「でも、オリジナルってそんなもの本当にあるんですか？……別に変わった事なんかありませんでしたよ」

「——そんな事はないだろう」真字まじはそう言うのと煙草に火をつける。

「どこがです？」

「例えば、詠よみはどうだ」

「……先生がどうかしたんですか」

「今日いないだろ」

「そりゃあ、休みなだけでしょう。家で寝てるんでしょうよ」

「本当に？」

「もしくは、遊びに行ってるのか」

「つまり憶測だね 嘘八百だ」

「何がですか」

「君は間違いなく知っている筈だよ。知っていて、そんなでまかせばかり言っている青年はむっとして反論した。

「どうして嘘って分かるんですか。あんたこそ言っている事がわけ分かりませんよ」

「冗談を——」真字は涼しげに笑みを浮かべる。

真字はデスクの灰皿にぼんと吸い差しを叩いた。そして、視線を青年から窓の外へと移し、そのまま黙り込んだ。

屋下がり。相変らず強い陽射しがオフィスへと注いでいる。

「それにしても何とも暑いな」真字は口を開いた。「排ガスで街中は臭いし蒸すしで大変だよ。ガーデニングの趣味もないからここも空気は悪いしね」

そう言って、煙草を灰皿で揉み消す。

「でも、何かいい匂いがしないかな……これは、ヤマユリだ」真字の口調は淡々としていた。「山中に生え、花は白く甘みのある強い芳香を放つ。おそらくここは、そういう所なんだろっ？」

「何言ってるんです……何が冗談なんですか？」

「だって、僕は君を知らないもの」残った煙草の煙を吐き出すと真字は言った。「今まで話しておいてなんだけど……君、一体誰？」

「——ちょっと待って下さいよ……！」

青年に、真字ははっきりと告げた。

「だから、僕は君の事を知らないんだ」

「先生の助手ですよ、どうしたんですか一体」

「確かに、彼女に助手はいるよ。でも男じゃない。現役の女子大生だよ。名前はなんだったか。えっと、確か大学よりも新宿のどっかのクラブの方が似合いそうな変人だったね……」

まあ法学部で、優秀な学生ではあるんだが——そうそう、穂波君と言ったっけな」

「そんな……出鱈目を」

「じゃあ、君の名は？」

真字は青年に鋭い視線を向ける。

「おそらく答えられない筈だよ、そもそもそんなもの存在しない。ただの式神、使い魔、もしくはゴーレム。早い話が機械でしかないんだから。機械であれば識別番号やら振ってあるだろうが、それすらないだろう？——欠陥品だね」

「何を馬鹿な、俺は……」

青年はそう言おうとした時、言葉が途切れた。

——俺の名前……何だ？

驚いている。自分自身にとっても当たり前の事である筈なのに、どうしても言葉にならない。それはとても違和感のないものなのだ。また同時にそう呼ばれると履き慣れた靴のようにしっくりと心にフィットする。そういう自分が自分であるという保障——承認である名前。

真字は淡々として言った。

「一度も呼ばれた事すらないんだ、意識していないという点では持っている連中と変わりはない。だから紛れても、考えなければ気付く事はない」

「いや……そんな……」

青年は寒くなっていくのを自覚した。四肢から痺れが身体中に広がっていく。どうした事だろうか。身体の中で動力が失われていく。

失われていくもの。

形はなく充たしていたもの。固体のように強靱で、液体のように柔らかか。音はなく、赤・青・黄といずれの何色でもない。

「——なくなれば、自由になる」

真字は言った。

その言葉で、青年は停止した。その身体はとても硬質であった。結晶という細胞によっ

て構成され、維持されてきた肉体。よく似た紛い物でしかない物体。それらしき外見ではあるが、本質的には異なるもの。根拠を問われればそれはなく、確かめようとするれば途端に姿が失せる。

あの夜佐加という町と同じだ。

「君のプロフィールを教えてくれないか。どこで暮らし生活しているのか。家族や友人は？記憶を失っているのかい。だとしてもここにいるという事は何もかも忘れてるわけじゃないだろう？。ここでもこうして話をしている事以外で何も憶えていないなんて事ないだろう。少なくとも、ここ数日ぐらいは残っている筈だ」
真字は訊ねた。

「どうやって、帰ってきたんだあそこから」

確か、それは……。

詠と一緒に帰ってきた。

来た道をそのまま戻って……。

車に乗って。

その後は……

道筋はどこを通ったのだろうか。

どこで車を降りたのか。

家はどこだったか。

何時頃出て、何時についたのだろうか。

天気は？ 晴れ？ 雨？ 曇り？

その前に。

——本当に帰ってきたのか？

そうなっているものという前提が失われ、そのままの姿が顕わになる。どんなに目を背けていても、どんなにそう演じてみても、どんなに言葉で飾ろうと、そこにはそれ以上のものは存在しない。事實は事実以上ではない。以下でもない。それだけのもの。

青年は、そこにいなかった。

真字の目の前に立っていたのは、ただの人形だった。ただの金属の塊でしかない。人形というよりそう見えているだけのもの。おそらくはそのように作ってあるのだろう。不格好に折り重なる岩石でしかなかった。

「それにしても男の似姿とは——」真字はため息を一つつく「人の妄執恐るべしと言った所か」

そして、ここは真字のオフィスではなくなっていた。

——夜佐加の郷。如月家の館の裏庭だった。

目の前に、夜佐加の磐座いわくら、社があった。

館の裏庭には石造りの祭壇が据えられていた。広大な方形をしている。木々で覆われた覆う林の中でこの一帯だけ草一本生えていない。地肌は土でなくなっている。真字まじの足下にある固い感触からして鉱物の結晶であるに違いない。

夜の月明かりで、鈍く光っている。

祭壇は人の手でカッティングされたものではない。自然に形成された結晶体の構造を持っている。まるで、地表に出来た腫瘍。そして、その上には一本の樹が生えていた。

巨大だ。樹齢で言えば何百年、千年近くはあるのではないかという大きさである。葉はなく、枝だけが無数に伸びているのが分かる。そして形はそうであっても、科学的には植物ではないものだ。

それは、鑄造されたかのように金属の光沢を宿していた。

樹の中には広い洞が開いている。

真字まじがその洞の中へと視線を向けると、月代詠つきよ、そして助手の穂波香奈が洞の壁に捕らえられているのが分かった。金具などで縛り付けているのではなく、壁面にめり込んでいく状態である。

「まあ、間に合ったか」真字まじはズボンのポケットから煙草を取り出し火をつける。「――

「……言わんこっちゃない」

そして、祭壇の上へと行くと大樹に向かってゆっくりと歩み寄り、梢の先を見上げる。視線の先、詠と香奈の二人の前には一人の女性が立っていた。

「こんなの遠くからじゃ見えなかったな。箒木がこんな所に生えてるとは思わなかった」
生暖かい風が吹くと、真字のほおを撫でた。「……ここで、この樹の守をしているというわけだな——あなた」

如月沙月だった。

「あなたがこの箒木の主だね」真字は驚きせず、のんびりとした口調だった。

「……箒木？ 何ですそれは——これは当家の神木で名はありません」

「そりゃあないだろうよ。名前をつける必要もない。まあそういう類のもの——と言った方がいいのかも知れん。遠くからは見えるが近くではその姿を見失う。この樹は逆だがね」

「見える」というのは、光が眼球に入り、視神経がその光を捉えて像を結ぶ事だ。要するに、光がどこかで曲がればあるのに見えず、ないのに見える。

光は直進する性質を持っていると言われるが、一面的な定義でしかない。正確には「進む媒質の中で最短時間となるように進路を取る」のである。

なので、密度や他から力がかかるような場所だと進路が変わる。水の中などで屈折するのはそのためである。

「——ここは力場が狂っているんだ。言うなれば、地上に出来たブラックホール。光すら

ねじ曲げるほどの時空の歪み。本来、そんな力場が存在すれば周囲の空間すら歪めてしま
い星に大穴があいてしまう筈なんだがそうはなっていない」

真字は煙を吐き、吸い差しを地面へと落とす。

涼しい眼差しで沙月を見据えたまま。

「箒木は力場の狂った場所に生え、力場を取り込んで外部から隔ている——」そして、シ
ヤツの胸ポケットから貴金属を取り出した。「こいつもその一部だったものだ。こういっ
た地に人が暮らすのは難しい、というより無理なんだよ。ブラックホールと同じでね、一
度入ったらもう出られない。そして中は時間が止まったようになる。人間の性質など通用
しない——」

蓬萊珠之枝。

これは、永代の物である。

そう真字は言った。

「——永……代……？」冷たい眼差しを沙月は真字に向ける。

「その通り」真字は沙月の様子を気にも留めない。「——此方も彼方も、所詮は人間の尺
度。自然科学もまた変わらない。結局はそれぞれ、人によって考え出された論理によって
構成されたストーリーでしかない」

そこからかけ離れた、人の論理では届かぬ理の世界。

それが永代。

「オ・リ・ジ・ナル・そのもの・の世界。知るは難しく、測るに難い。出来るのは断片を垣間見る事
々らしいなもの。この世の理そのものだ。人でありたいのなら触れてはならない。干渉すれ
ば、己すら失う事になる」

真字はまんじりともせず言った。

「——あなた、もう人間じゃないんだろ？」

沙月は黙ったままでいた。真字の言葉に全く動じる気配を見せなかった。それどころか、
悠然と真字に向かって歩み寄っていく。

そして、真字と向かいあって立ち止まった。

表情は穏やかなまま変わらない。

口を開く。

「とんでもございません——冗談を……」

「じゃあ、何だい？ こういう場所は栓を抜いたバスタブのようなものだ。放っておいて
も誰かしら引き寄せられてくる。そうやって迷い込んだ人間を餌にしてこの樹を守ってき
たんじゃないのかい？」

「人を……ですか？」

沙月の口元が不自然に歪んだように見えた。筋肉と骨格の動作が不自然だからだ。

しかし、真字は気にも留めない。

「ここは元々、人を寄せ付けない場所だ。箒木がこの土地の歪みを押さえるシステムであ

る以上、その外にいる人間が介入するっていうのは土台無理のある話なんだよ。可能としたのはそのシステムに人を組み込んだからだ」

八尾祀——人身御供。

「ウイルスと同じだ。システムの一部に穴を開け、ダミーで穴を埋めて擬装する。如月の初代がやった事だ。この樹の枝を折り、代わりに人間を捧げた——人間もシステムの一部として認識され一見何事もないように暮す事が出来る。当然だが欠点もある。この方法だと最初の内は機能するが、やがて同化して元通りに修復されてしまう……そうなればまたやり直し……つまり、ずっと生贖が必要となる」

「ずっと、そうしてきたと仰るのですか？」

「そういう事。別に難しい話じゃない。神事であったし、そういう時代じゃなくなっても流れ者でも良かったわけだし、金さえ積みめば揉み消せる。今はその必要もない。最上和樹もそうだ。いない事にしてしまえばいいのだから」

そう言った時、空気が変わった。樹の陰になっているところに沙月の目が鋭く煌めく。獣の眼差しだった。

「——だとしたら……」

口調が変わりはしない。

しかし、陽炎のように沙月の姿が揺らいだ。呼吸するようにして、風が鳴る。風というより吐息のようだ。いや、吐息そのものである。戦慄きも聞こえてくる。真字の身体から

発せられたものではない。

樹だ。箒木ほうきぎと呼ばれるこの大樹からのものだ。

この樹は——生きている？ いや、そう考えるのは違うのだろう。生きてもいるし、生きてもいない。

「くくくっ……くくくくくくっ——」

笑っているのか。

……いや、違う。

沙月は笑ってなどいない。表情に変化もない。

その声は、軋こもむ音だ。物体と物体が擦れているだけ。雨・土・風が発している音と変わらない。そこに何も意味はない。ただの振動であり、聴覚によって感知される現象に過ぎない。

聞こえるのは、そう思えるというだけ。

そうだと考えられるものに似ているというだけに過ぎない。

この夜の、吐息のような風鳴りもそう。

「なるほど……」

樹の枝の形が変わった。枝先が鞭むちのようにになると、掌てのひらのように開いたかに見えた。それは、一つの意志の現われだろうか。

真字まじは分かっていた。代弁だいべんしているのか、そうではない。

——これは彼女そのものだ。

「——」沙月の声？、そうではない。

これは地鳴りだ。樹が巨体を震わせている。震動で外壁が剥がれ落ちた。幹が柔らかに身体をくねらせている。

その根は広く大地の中で広がっているのだ。人の身体の中にくまなく張り巡らされた血管に神経、そして筋原繊維と同じ。システムの拳動を制御するアルゴリズムを体現する実体そのもの。そして、彼女そのもの。

メカニズム。

それは必然性——論理によって出来た構造。町も人も、この目に写る情景全てがその一部。メカニズムは自らの構造・原理によって、構成する要素の全てを内包し、機能をあらわにする。そして、その中に存在するものを、全てその一部とする。

ここにある全てを、記憶という設計をもって、彼女という動力によって。

——。

「……残念ながら——」静かに口を開いた。

真字はそこにじっと立っているだけ。そして、その様子に変わりはない。

樹の拳動は止んでいた。樹の幹は乾いた音を立てている。中で金属の繊維が避ける。動きたくても動けない力が逃げ場なく弾けているのか。宙に曝けられたように静止している。

それは、止んでいたのでなく、鎮められた姿だった。

「あんたと僕は同じだ。だから、手出しは出来ない——磁石だって同極は反発するものだろう？」表情一つ変えていない。ゆっくりと煙を吐き出している。「かつては人だったが、そうではなくなったんだよ色々あって……今は、永代の理を調べている」

人呼んで、永代記——永代を記する者の総称。その理に侵された者。

話の最後に真字は言った。

「——その二人は返してもらうよ……あと、ここも封印させてもらおう」

そして沙月へと歩み寄り、手にあった蓬萊珠之枝を沙月の胸へおもむるに突き刺した。

枝は身体の中へと吸い込まれていく。切り離された一部が補完され、完全な象を取り戻す。つまり、復元していく。紛れていた嘘が顕わになる。それは、中心から辺境へと追いやられて、ただの一部と化するのだろう。

時間だけが経っていく。

血は流れず、沙月の姿はそのまま立ち尽くすだけだった。

視線は宙を彷徨っている。「心ここにあらず」のではなく、すでに「心そのもの」が失われていたのかも知れない。そこにあるのは、もの言わぬ木石と変わらない。

苦しみもせず、悲しみもせず。

人の形はしていても、それは人の有り様ではなかった。彼女がもう一部になっているのなら、そういう事なのかも知れない。

なぜなら、彼女は樹そのものであるから。

如月沙月という人間はすでに存在していない。その人格は樹の機能の一つでしかなくなっているという事なのだろうか。スイッチを入れれば、主の望む動作をするという機械と寸分違わないような。

もちろん、その主がどんなものであるかなど真字には分からなかった。もっとも、今となっては不可分であるのだから、そう考えるのはナンセンスだ。

彼女という樹——帚木共々ここは封印されるだろう。人の分け入る事も叶わない場所となる。

「……何を」

沙月の形をしたものは真字へ訊ねた。

「大した事じゃない。元へ戻すだけだ。千年以上ぶりに」煙草の煙をくゆらせて真字は答える。「欠けていたものを戻せば、元通りになる。その枝が身体に取り込まればそれで終いだ。誤謬は修正される——朝に陽が昇り、末期に人が土へと還るように」

そう言った時、沙月の身体がびくりと震える。

それまで平静そのものだった真字が、初めて目を見張った。

人間の口調で沙月が言葉を発した。

「……あの人は……まだ——」息が絶え絶えなぐらいにか細く、声は低い。

——沙月自身が戻った？

そのように思えたが、すでに意識はもうろろとしていた。

「……私は」

「あなたは、もう人じゃない」真字は冷淡だった。「昔はそうだったんだろうが、やらかしたって所だ」

「……あの人は」どうも、真字の言葉はもはや耳には届いていない。

後は、もう一度うわごとのように声にならない言葉を口にしたきりである。

沙月は二度と動く事はなかった。

ロウソクが消える一瞬に燃えさかると同じく、彼女自身である心の残り滓が最後に現れたのだろうか。すでに復旧しつつあるシステムに排除され、完全に消失したと考えるしかない。

真字の前にある彼女の姿は美しく、そのままであり続けるのだろうか。まるで精巧極まりない機械であるように。

消えてしまったのはいわば、法的に認定された資産評価額程度のものなのだろう。需要供給の関係によって時々刻々、帳簿の計算によって調整され変化する、あってもなくてもその機械自体の機能を考えるには大した意味を持たないような虚ろなもの。

ある筈なのに、厳密に測る事は出来ない。その方法もない。

そんなものはどこにでも、いくらでもある。珍しくもないものだ。そんなものに振り回される。滑稽な話だが至る所で起っている事。

——どうしてまだ、そんなものがあるのやら……

そんな事を考えていると、身体がびきりと妙な金属音を生じるのを真字は自覚した。人の生身では起きる筈のない音だ。

響。

舐まれた身体が上げる微かな悲鳴。

そして、そうでないものの吐息。

身体の中で蠢いている。

そしてしみのように、じりじりとだ。

——浸食している

声もない。手触りもない。だが存在している。おきらく、また一段とぞういふものに近づいたシグナルなのだろう。

「……こっちが知りたいねえ、全く」独り呟くと真字には苦笑するしかない。

空を見ると夜空に星が浮かんでいた。ただし、星図のような並びではない。文様でも見るかのような並びであり、タペストリーを見ているかのようにだった。

天頂には、オーロラが幾重にも輝く。

ヤマユリの花の香りがして、目を覚ました。その匂いは彼が私の身体に刻んだ痕跡を思い起こさせた。

——今日も彼は、まだ帰ってこない。

あれからどれぐらい経ったのだろうか。

この部屋に籠もるようになってから、時計は壊れ、暦はなくしてしまっただけから久しい。

扉は閉じられたままだ。もう、館には誰もいないのだろうか。

薬を、飲まなければならぬ……あの薬を。

家に伝わる秘薬。

病のため、手放せなくなっている。相当な劇薬であるという。しかし飲めば、この腐れていく身体もその容姿を失わずにすむから。一旦服用すれば、四肢にすみずみまで行き渡り、身体の組成を助ける働きがあるという。一方で、効能が過ぎるため強い毒となりうる麻薬のような薬だ。

しかしそうでも、彼が帰ってきた時に、醜い姿を晒したくはない。

薬の製法は記録に残っていた。これは元来、如月の神事にまつわる霊薬であったとされている。ある種の金属と水、そして硫黄より濾過した酸と服用する者の血液が必要とされている。使用する金属は館に保管されていた。それは生暖かい熱を帯び、肉のように弾力

がある一方で金剛石のように固い。

私がこの薬について知ったのは、病の治療によってではなかった。まずは彼を、助けるために。

この郷に流れてきた男。

二年前に山中で行き倒れている所を発見された。何でも、先の戦争で復員してからは流れる者同然の暮らしであったらしい。商才のある男だったようだ。父はその才を見込み、家の者とした。

私の病はこの郷に昔からある風土病の一つだった。不治のものであるが、すぐに命を失うというものではなく徐々に身体を侵す類のものだった。徐々に身体の各器官が機能を失い腐敗して死にいたる。そして人に伝染るものだ。

だから、私に誰も近寄りもしない。父は跡継ぎとなる弟には気を留めたが女子である私には興味はなかった。母に任せきりで、その母が他界し、患うようになってからはすっかり部屋に隔離されるようになった。病が分かったのは五年前の事。以降は檻の中で観察される動物と同じだった。すでに、自分はどう人間ではないのだとすら思っていた。

毎日毎日が同じように流れる。

時間がすり切れていく。

ただ、朽ちていくだけ。

彼と出会うまではそうだった。

病の穢れを纏った私を、美しいと言ってくれた。彼は、私の側にいてくれたのだ。それは仕事の内であったのかも知れない。もしかしたら、父へ取り込むため策略だったのかも知れない。

しかし、そんな事はどうでもよかった。私が人である事を知らしめてくれる。心の中に小さくだが煌びやかな温もりを抱かせてくれる。それだけでいい。

私はいずれ死ぬのだろう。どんな様子であるのかは自分では想像が出来ない。でも最期に見送ってくれるのはこの人であって欲しいと思っていた。密かに通じるようになって、彼への印象はきつと変わらないだろう。

とても私は、充たされていたのだから。

だが、その日々は終わる事になった。

私と彼の関係に最初に気がついたのは弟だった。家の次期当主を約束されていた男だった。それでいながら猜疑心の強い男でもあった。

弟は私との関係を父へと密告した。

しかし、私のような者と彼がそのような関係だったとしても、それだけでは父が気にする必要などない筈だった。娘だろうが病に侵された厄介者でしかなく、またそのような者を嫁として迎え入れる所などそうありはしなかったからだ。きつと、婿として迎え入れ、弟の補佐——もしくは跡目とする事も考えたかも知れない。

だからなのだろうか。弟が父へ吹き込んだのは事実無根の話であった。彼が私との関係を利用して如月の家の財産を闇物資として流用していると言ったのである。

彼は自分の身の回りで起ころうとしている事に気がついた時には、もうどうしようもない状態だった。弟と私では父がどちらが信じるかは明らかだった。そして、恐ろしい話を耳にした。それは、思い出したように姿を見せる女中が、ドアの外でしていた話を盗み聞いて明らかとなった。

血の気が引く。

八尾の誓にするという。それは如月の家に伝わる祭礼。それが何を意味するのか私にも分かっていった。

逃げて、と私はそう言うしかなかった。だが、彼には理解出来ていなかった。この家の秘密について知りようもない事だったからだろう。

私は、彼を失いたくなかった。

あの薬はその時、私に対して毒として盛られたものだった。それは飲み水に混ぜられていた。無色透明であり、味もないため口にしても分からなかった。口封じか、もしくは私も邪魔になったに違いない。

だが、飲み干した後で異変が起こった。身体の芯が灼けついたように熱くなった。その後、全身に寒気に走り、手足が激しく痙攣する。喉の奥に何かがかえたように息が出来なくなる。やがて咳き込むと、激しく嘔吐した。

真っ赤な血液の塊で、吐血してから一昼夜の間、私は床の中で苦悶した。全身が硬直し、針の筵に横たわるほどの激痛だった。身体がばらばらになり、その欠片がまた組み合わさる。自分が違うものに蝕まれた感覚と言ったらいいのだろうか。

しかし、私は死ななかつた。後遺症らしき症状は残っていないように感じられる。以前と何ら身体は変わらない筈であつた。

変わったのは心の方だったのかも知れない。

毒を入れた女中を脅し、薬を手に入れた。そしてまず、女中でその効能を実験した。どうやら、私が助かつたのは病身——いや偶然であつたのだろう。

実験が完了した私は実際にその薬を使用した。こみ上げてくるその感情を私は押さえるつもりなどなかつたのだ。

それから弟は死に、父ももうしばらくすればいなくなる手筈となつた。

彼は以前と変わらなかに見えたが、最近は少し黙り込む事が多くなつた。

その時はいつも遠い目をするようになっていた。何か考え事をしてるようだった。

そうしてある日、彼は郷の外へと所用で出かけたきり帰って来なかつた。

確か仕事の用で、長期の滞在であると彼は言つていた。

郷の外へと出るのはここへ来てからは初めてだ。彼が行かなければならないものだったのだろうか、そう訊ねると必要があるのだという。しかし、そう話す彼の様子はどこか上の空であつたように思える。

そこで、私は御守として一振りの杖を持たせた。

これがあれば、彼はここへと帰って来なければならないだろう。それが今の私には分かっている。

——それは、身体の一部なのだからだ。

彼が戻ってくるまでは私が家を守っていなければならぬ。

——彼は帰ってこない。

また、薬を飲む。

喉を通って収まると、身体が火照るのを感じる。

待つ内に、私の容体は悪化していったようだ。一時期、私の容体はひどく安定していたようだった、しかし、また病の進行が再開したようだった。

身体のせいで、家の事業は手に余り、使用人達に任せきりとなっていた。自分でもどういふ病状であるのか、察するに余りある状態だった。

彼が帰ってくるのに、まだ私はいなくなりたくなかった。

あの薬の効能を知ったのは一人になってしばらく経ってからだった。館の書庫に残っていた古文書をその時初めて目にした。

今までは他人に使っていたあの薬を、飲み続ける事になるとは考えていなかった。しかし、効能は確かであった。

身体には活力でも腕力でもないが、ある種の方が宿るようだった。自分の身体が拡張していく錯覚すらある。いや、本当に大きくなっていくのかも知れない。身の回りだけでない、この館の中の様子、郷の街並み、それだけでない山々の有り様までが手に取るように分かる。

全てが自分の思いのまま。掌の中にある。

一方で、今までよりも意識が希薄になっている。思考がはっきりとしない。もし、心が有限なのであれば、その器が大きくなれば密度が低くなるのだろうか。

——もし、これ以上大きくなったら……

どんどんと希薄となくなっていき、もし密度がゼロに限りなく近くなったらどうなるのだろうか。

——。

また、薬を飲まなければならぬ。

帰ってきた時に、醜い姿を晒したくはない。

彼は、帰ってくる。

いつまでも、待ってるのだから。

——平成22年9月末。

すでに夜半である。神崎真字と月代詠、そして穂波香奈の三人は居酒屋鶏丸にいた。詠のオフィスの近く。JR線某駅から歩いて10分。日本酒と店名の通り鶏料理の美味しい店だった。

店内は仄暗いムードのある照明、和の雰囲気のインテリアだが暖炉はレンガとお洒落な内装の店である。囲んでいるのもダーク・ブラウンをしたウォルナットのログテーブルであり評判もよい。

なので、三人の囲むテーブルだけが店の雰囲気から異様に浮いてしまっていた。

無理もない話で、一人はくたびれた紙切れのように冴えない三十男、もう一人は居酒屋そのものが似つかわしくないどこかのオフィスに自生してそうな〇工。さらに、キラキラに着飾った夜の街のお嬢もどきがテーブルを囲んでいるのだから、傍から見れば何の集まりだか見当もつかないだろう。

もっとも顔なじみなので、店員からは奇異の目で見られずにはすんでいる。

「……で、どうしたの？」

「全くもって、何と言うんでしょうか、どうもこうもありません——」真字の問いに詠はため息混じりに答える。「いないんじゃないんです。裁判所へ申請するので、後

は他の先生にお願いして終わりです。ウチでは管財人はキャパとして無理ですし」

「なるほど——まあ、ゴーストタウンなんて目にする機会は滅多にないんだから、それはそれで良かったじゃない」

「……まあ、そう考えるのがいいでしょうね」

詠と香奈が撮影した現地の写真からみると、そこに写ってるのは廃墟そのものだ。大半の建物は原型を留めていない事がはっきりと示されている。人など暮している筈もない事は明らかだ。

そこには何もありません。人に関係のあるものは存在していない。

「ったく、大変だったんですよお……だって山奥ですよ山奥。いっくら仕事とってもすよ——」

「お酒とお料理何にします？」

香奈の言葉を遮って店員が注文を取りに来る。店員は角張ったマユをした七三分けだった。

やがて、ドリンクと料理がテーブルに並び、三人はそれぞれ皿を箸でつついていた。

「昔は栄えてたんですよ」

「……何が？」

出し抜けに詠が言ったので、真字は訊ねる。

「あの——」考え深げに詠は答えた。「どうも最上精三の資料を精査すると、上京前もそ

れなりだったみたいなんですよ。彼の残したメモや遺品の一部を精査してみると食い詰めて上京したというわけでもなさそうな……」

「そういや、若い頃から持ってた日用品とか値打ちものでしたよねえ」助手であった香奈もそう言ってビールを喉に流し込んでいる。

しばらく黙っていたが、真字は箸を口に運んびながら言った。

「——何というか……怖かったんだろうね」

その言葉に、詠と香奈の二人は不思議な顔をして真字を見つめた。

「……何がですか？」

「大したもの……なかったすよ」

手にあった盃を傾けた後、真字は口を開いた。

「いや別に——こっちの話」

如月沙月も人魚だったのだろう。そして、最上精三という男はただの人間であったという事に過ぎない。

——？

甘い芳香が真字の鼻をかすめた。

ヤマユリの匂い。

思わず、真字は店内に視線を走らせたがこれといって変わった様子はなかった。訪れている客を見ても別段普段と変わりはない。

きりど、どいにもある話なのだろうと真字は思い、語をまた口にした。

(メモ)

・伊香保呂能 夜左可能為提尔 多都努自能 安良波路万代母 佐祢乎佐祢呂婆
いかほろの やさかのおでに たつにじの あらほるまでも さねをさねては

(万葉集 卷十四)

・その原や ふせやに生ふる 常木の ありとは見えて 逢はぬ君かな

(新古今 卷第十一 恋歌一 坂上是則)

いずれも、恋の歌とされている。

万葉歌にある「努自」は——虹であり、古代では凶兆されていた。この歌にだけ用いられている言葉である。

また、坂上是則を始めとして和歌で使用される「常木」は——遠くからは見え、近づくと姿を消してしまう樹木である。

「努自」と「常木」

言葉として、推定されるルーツはともかく、その実証されたモチーフが何であるのかについては研究の途にあり、未だ分かっていない。